



高橋余一の「生活絵巻」

04

イカダ
筏乗り



〔時計回りに〕

(筏) ふんばり、つけ木、ふじつるべ、はら帯、かじつば、かじ枕

(筏夫) ふじつる、尻あて、なた

筏流し

木曾や飛騨の山中で伐った材木は錦織と下麻生の綱場までバラクに流されて来て此所で筏に組み下行した通称「ホーロク」にその検問所があった(渡辺栄助さ)筏夫は往路を筏で帰りは長いカイをかついで陸路を帰る

歩き小使が有名(資料 三品金六氏)

筏は十三尺物二丈継ぎを一枚に組み二人で古井迄下りそれからこれを二つ合せて組み二人で下る(資料 渡辺開三郎氏)

木曾川と飛騨川の上流で伐採された木材は、筏に組んで川を下り運ばれました。筏は、川合でさらにつなぎ合わせ、下流へ下しました。

筏乗りは、鵜沼まで下るとそこから、カイを担いで歩いて帰ってきました。稼ぎがよく、憧れの職業でした。

昭和に入り、水力発電のダムが建設されたことと輸送が鉄道や車といった陸路に変わると、筏流しは姿を消しました。

絵巻には、カイを肩に載せ腕を回してしっかりと抱え、軽快な足取りで帰り道をもどる筏乗りが描かれています。背筋がすっと伸びた背中に、きつぷのいい筏乗りの人柄まで見えるようです。